
都 市 と 人 間

——人間にとって都市とは何か——(2)

岩 男 耕 三

一 都 市 の 起 源 (承前)

人類が史上はじめて、それまで存在しなかった新しい社会生活の単位(社会形態)としての都市を形成したことは、それが社会の構造と人間の生活に根本的な変化をもたらし、その後の歴史にも大きな影響を与えてきたことからみて、きわめて画期的な事件であった。そのような都市は、いつどのような契機をもって生誕したのか。又、その後今日にいたるまで、この都市を都市たらしめてきたものは何か。

¹⁾
前稿では、こうした都市の起源について、世界で最も早期にこれを現出したとされるメソポタミアの場合に探ってみた。

本稿ではそれを受けて、以下、日本列島の場合について解明を試みる。

最近20年余にわたって、日本列島各地でおびただしい量の古代遺跡の発掘調査が実施され、当時の村びとの生活や集落の構造、その歴史的変遷について多くの事実が明らかにされてきた。それは一面、戦後各地での開拓や、60年代以降全国的に展開した地域開発が発見のきっかけをつくったという偶然によるとはいえ、他方では、戦前の神話による古代史にあらためて科学の光をあてたいという強い期待に支えられたものであった。また歴史的関心につ

いてはとくに、畿内か九州かという卑弥呼をめぐる邪馬台国論争にもかかわりがあったであろう。1990年12月、新聞紙上をにぎわして一種のブームをまねいた北九州の吉野ヶ里遺跡での新しい発見もそのひとつであった。

以下小稿では、都市の起源について、戦後考古学の分野で行われた発掘と議論を検討することにする。

吉野ヶ里遺跡

初めに吉野ヶ里(環濠集落)遺跡発掘調査の経緯と、とくにその「弥生都市」論に注目して、研究の成果と論点を、高島報告²⁾をもとに整理してみよう。

吉野ヶ里遺跡は、脊振山地^{せふり}の南に福岡・佐賀両県にまたがってひろがる筑紫平野の中央部の、なだらかな低丘陵地一帯に散在する遺跡群である。これまでに発掘の手が加えられた部分が40ヘクタールにおよぶ弥生時代最大の環濠集落とされる上、弥生時代全600年にわたって継続的に期を重ねて発展しているため、次の古墳時代へのつながりをもふくめて、この時期の日本列島における集落の発展を跡づける情報をもつことでも貴重な遺跡である。その存在が確認された1935年の時点ですでに「邪馬台国」との関連が注目されていたが、1953年の水害復旧工事を契機に以後、大規模な環濠遺構や堅穴住居、高床建物の遺跡、100基をこえる甕棺墓^{かめかん}などの他、多数の人骨、副葬品などが発見されて、90年ごろまでにはほぼその全貌を知ることになった。

さてこの大規模集落は、弥生時代初期に、墳墓・倉をともなった2～3の堅穴住居群で構成される集落としてあらわれる。そこでの稲作農耕は「縄文時代晩期後半(前5～前4世紀)」に成立したもので、イネのほかムギ、アズキ、リョクトウ、ソバ、その他などの栽培種をふくみ、さらに家畜としてのブタもみられるところから、弥生時代初期にすでに水稻・畑作物・家畜を一体とする複合的農耕が行われていたことを示しており、報告はとくにこの点に注目した。これは、その後の列島社会の文化の基層となったものであり、この農業経営構造が、この地域に「きわめて短期間に政治的社会を形成」さ

せたものであるとみる。すなわち、(豊かな生産力を基礎にして)こうして形成された集落はやがて分村するにいたるが、この過程で現れる「有力な親族集団」は、環濠をそなえて他の集落を統合するようになる(これは首長の成立を意味するのであろう)。この統合の構造はしたがって、「縄文時代以来の氏族的社會を解体して成立」したのではなく、その連続の中で、基礎構造をひきついで成立したものとみられるのである(報告のこの部分は難解である。氏族的社會の基本枠の中での分村といえ、かつて農村社會学で議論されてきた「本家＝分家の家連合」としての同族を連想させるが、もちろんそれとはレベルが異なるし、他方、政治的社會の形成とは一般には階級分化による支配關係の形成と解されるが、この点にも説明のほしいところである)。

ところで他方、弥生時代前期には、ここではすでに青銅器の鑄造が行われていたとみられ、丘陵南部の1地区では、フイゴの羽口(送風口)、ルツボなど青銅器鑄造關係の資料が出土して、これにたずさわる専門工人が出現したことを示している。ところが、玄界灘沿岸地帯にはこの時期には鑄型は出土しない。これまでのところ、青銅器・鉄器は西アジアで発明されて日本へ伝えられたとされており、直接には大陸から伝わったものであろう。ならばなぜ、朝鮮半島に對面している玄界灘沿岸地帯でなく、長崎県をまわりこんだ佐賀平野に伝えられたのであろうか。

報告は、新しい専門工人ないしはその製作技術がある社會に受け入れられるためには、その社會が一定程度成熟して、それ自身分業体制へと移行するだけの準備ができていることが必要であるが、その成熟度の違いが吉野ケ里集落に青銅器鑄造を現出させたのだと説明する。つまりそこでは、内在的に共同体分解(専門分化)の準備が進みはじめていたということであろう。

この報告は、弥生時代の吉野ケ里に都市の萌芽を見ようとするものであるが、分業の発展は村落の都市への転化の重要なファクターであり、その限りでこの説明は有効である。それは、報告のいう吉野ケ里における「自然発達的な」古代社會の変化が、専門工人ないしはその技術を定着させたことを、

「弥生社会の構造から理論的に説明する」のに成功しているといえよう。

さて、弥生時代中期前半（前1世紀）になるとここでは、一般成員のそれとは際だって異なる墳丘墓が出現する。吉野ケ里遺跡の北につくられた墳丘墓の被葬者は、その副葬品などからも、首長・祭事者など特定の身分であることが推察され、さらにその墓前では一般にくらべてはるかに大規模な祭事が行われたことも認められている。

このような墳丘墓の出現を、それでは、吉野ケ里環濠集落が「小規模な農耕集落から、地域的な政治的統一社会（クニ）が成立した段階の地域的拠点としての大規模な集住集落（すなわち、日本における自然発達的な都市）」に転化する過程の中にどう位置づけることができるだろうか。報告は、ここにはじまった大規模な祭事はやがて、「魏志倭人伝に記された卑弥呼の鬼道に一部通じて」いくものであり、逆にいえばそれは、後の前方後円墳などの首長墓の祭事の思想の成立を示すものであるという。さきに見たところの、「自然発達的な」社会変化による村落構造の変化（都市の形成）は、その後の展開をみることができず、こうして、いわゆる政治都市の生成をあらためて確認することになったのである。

以上、吉野ケ里遺跡の大規模な発掘調査報告の要点を整理し、かつ一部紹介者（岩男）の意見をも添えながら紹介したが、正確を期するために、ここで一応報告者自身の要約を引用しておこう。

「吉野ケ里遺跡では、農耕社会が成立し拡大していくなかで、弥生時代中期前半までに、環濠・条濠で画する首長層の特定居住区の成立、青銅器鋳型とその工房跡にみられる専門工人の出現、墳丘墓や列埋葬がしめす身分格差と社会的地位の顕現化、墳丘墓前の立柱と大規模な祭器埋置など、地域的社会の中核的機能をもつ集住集落として、しだいに拡大・発展したことを述べた。弥生時代中期後半になると、延長約2.5キロメートルの外環濠によって防禦された約40ヘクタールの巨大環濠集落がはじめて成立する」。

これは、この環濠集落の最盛期の姿とみられているが、この時期には他方、

「その周辺に衛星的ともいえる小規模な集落が形成される。巨大環濠集落——原始的都市——を中心とした地域社会の確立である」。そしてこの後、弥生時代後期を通じて、この環濠集落は「地域の政治・宗教・経済的拠点としての性格と機能を一貫して保持」することになるのである。

ここに見る「弥生時代の都市」は、列島社会に育った自然集落が、地域の諸機能（宗教・政治・経済など）の拠点として成長した「自然発達の都市」であり、したがって高島は、ここには、「後世の政治的・政策的都市」（平城京、平安京など）とはその発生基盤を異にする「都市」の萌芽が確認される、とするのである。³⁾

4～7世紀の集落

5～6世紀の列島社会では、首長居館と農民集落が農村の景観を二分していた。両者には歴然とした較差がみられ、「あたかも大地の一部と化したかのような多数の農民集落」にたいして、濠や堀で囲まれた少数の首長居館は、農民から隔絶しているかのようにであった。

5～6世紀の畿内農村の遺跡の発掘調査から、広瀬和雄は、当時の村落構造をこのように描いた。⁴⁾「あたかも大地の一部と化したかのような農村」……これこそは、まさにそれを一言でいい当てたような農村の本質とっていいだろう。ここで検討された村落遺跡は、さきに見たような、その画期的発見が新聞紙上をにぎわすような弥生時代の巨大環濠集落ではなく、堅穴住居や掘立柱建物^{ほつたてばしら}（平地式住居）と高床式倉庫の組み合わせを基本とするような、ごく一般的な古代集落である。いくつかのこのようなケースを次に見よう。

大阪府大園遺跡^{おおぞの}は、5世紀後半から6世紀末にかけて営まれた、10万平方メートルのひろがりをもつ集落遺跡で、140棟の掘立柱建物と、9個の集落が確認されている。すぐそばの後背湿地の水田で稲作農耕を営んでいたが、蛸壺^{どすい}や土錘がみつかったので、約1.5キロほどの距離にある大阪湾で漁撈

をも営んでいたものとみられている。

同じく大阪府の^{こさか}小坂遺跡は5世紀前半とみられ、3棟の堅穴住居と1～2棟の倉庫が配置されていた。^{すえむら}陶邑窯跡群の一角に位置し、^{すえ}須恵器やその製作器具などが堅穴住居から出土しているので、その生産にたずさわった専門的工人とみられるが、農具も発見されているので農耕も営んでいたと思われる。

又、6世紀後半から7世紀後半にわたる京都府^{しば}芝^{はら}ヶ原遺跡では、^{てつきい}鉄滓、^と砥石、^{いし}韃^{ふいご}の羽口、鍛冶道具が出土しており、自給量をこえる^{ぞく}鉄鎌、鉄鍬、鉄釘などの製作のあとが確認されている。

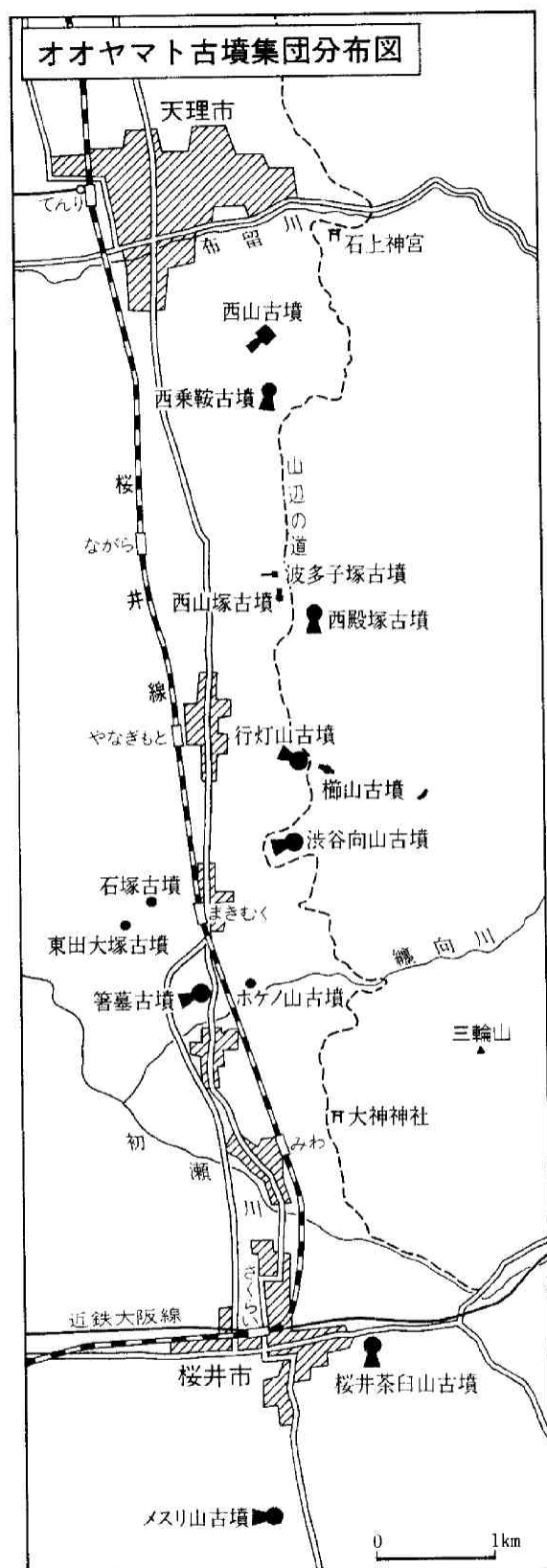
これらの例に見られるように、5～7世紀ごろの農耕民は、かなり広範に手工業や漁業に従事していたと思われる。上にみられたものは農閑期の生産活動のごく一部にすぎないが、いずれも専門的技術・道具を必要とし、「農閑期だけの専業、つまり〈農閑期分業〉」として営まれていた。しかもこれを首長が掌握して、農民は農業・手工業の双方でその剰余を収奪されていたとみられるのである。

一般に、生活物資や生産手段のすべてを自給できる社会は、きわめて少ないと考えねばならない。縄文時代でさえそうであったことが指摘されている。鉄・銅・金などの金属資材をはじめ、玉類や石器の原材料、塩などの食料資源まで、社会はもともと自己の再生産のためになんらかの分業を必要としてきたと広瀬はいう。ただ、時代によってその仕組が異なるのだ。すなわち、古墳時代には縄文時代と異なって、集団内・集団間二重の分業が展開し、そしてこの交流に首長が介在して流通と、したがって集団とその生活とをともに掌握するにいたったのだと。

それゆえ、こうした分業を1世紀、2世紀あるいはそれ以上もつづけながら、農村はほとんど分解をおこすことがなかったことになる。

都市生成の契機として、とくに強い関心を集めてきたもののひとつが、この分業と、そして物資の交流、交易である。

奈良県桜井市の^{まきむく}纏向遺跡は、三輪山の西北のふもと、JR桜井線の^{まきむく}巻向駅西



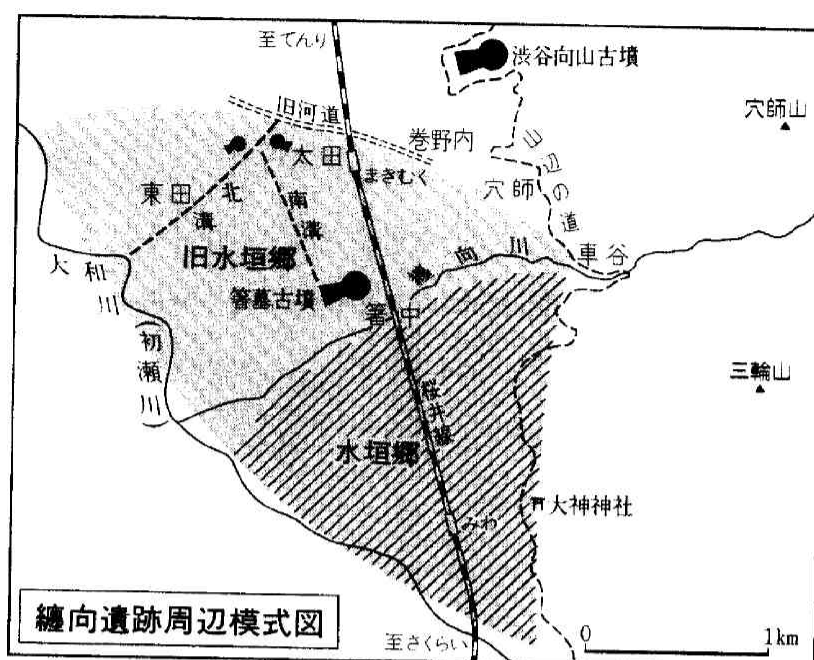
(和田萃，古墳の時代，小学館，1988より)

側の太田集落を中心^{おおた}にひろがる3～4世紀の遺跡で、このような交易の中心ということで研究者の注目を集めた古代集落のひとつである。これにかかわる太田，太田北，それに箸中の3集落を合わせると，纏向遺跡はじつに100万平方メートルにもおよぶひろがりをもつ巨大集落であり，この点だけでももはや農村のレベルを越えるかにみえる。ここで出土した土器には，北は北陸から南は中国地方にまでおよぶ遠隔地から搬入されたもの（非在地土器）を大量にふくみ，弥生時代終末期から，すでに石川，愛知，和歌山，山口から，ついで南関東，静岡が加わっていることが分かった。また大規模な大溝（運河）が検出されているのも，この集落の特徴であろう。⁵⁾大溝には北溝と南溝（いずれも幅5メートル）があり，西北流する南溝は北溝に合流して西南方に流れ，やまと川（初瀬川）に流れこむ。その他，三輪山と穴師山^{あなし}の間を西流して箸中集落を通り，大和川に合流する纏向川があり，これらは当時の盛んな物資の運搬を予想させる。

纏向遺跡のこのような“都市的”な特徴（「都市的世界の源初的なもの」）を最

初に注目したのは、
寺沢 薫⁶⁾（^{かおる}橿原考古学
研究所）だったとさ
れているが、その他
にも、鬼頭清明⁷⁾、都
出比呂志⁸⁾などがこれ
を論じていた。

鬼頭は、4～5世
紀を中心に営まれた
集落群である天理市
の布留遺跡^{ふる}について、（和田萃，古墳の時代，小学館，1988より）



発掘された遺構の中

に運河も存在するが、この集落では祭祀用の玉作りの遺跡や関連する遺物が
発見されており、また、ここには石上神宮があって古くからの宗教的拠点で
あったと考えられる。さらに諸資料からして「政治的拠点」でもあり、「非農
村的要素」をもっていたことが分かる。これとならんで纏向遺跡は、当時の
一般集落にはない運河をもち、大量の遠隔地の土器を出土していることから、
この時期の交易の大規模な中心地であったとみられ、一般農村と同類に論じ
られないことを指摘した。

だが、一般集落には見られない「非農村的要素」だけで、そこに「初源的
な都市」、「端緒としての都市」（いずれも鬼頭）の存在を認めることができるで
あろうか。すでに見たように、内在的な分業の展開と結びつかない交易は、
農村構造——たとえば生業の基本としての農耕——を変えるものではないで
あろう。都市とは何か、農村とはなにかについては別稿をまたなければなら
ないが、都市の「端緒」、「初源」をそこに見るためには、その端緒が爾後ど
のように展開するのかについての根拠のある見通しをもっていなければならない
であろう。現状ではわれわれは、そのための資料をほとんど持たないの

であり、鬼頭もいうようにそれは今後の課題である。

一般に都市をめぐる議論において、今ひとつ重要なことは、都市の概念について共通の内容をもつことは当面難しいにしても、各議論の場で、それぞれの論者のもつ基本的な規定を相互に明らかにすることであろう。列島社会における都市の起源についての認識が、大きくくい違ふことの重要な原因のひとつはここにある。1990年12月、佐賀県教育委員会の主催で行われたシンポジウム『古代国家形成の謎を追え』⁹⁾における古代都市に関する討論でも、この弱点は明らかであった。

一般農村に見られないいわゆる“都市的要素”について、宗教的拠点、政治的拠点など、全体社会（政治的秩序）の中での機能が挙げられるのが通例であるのは、上のことと関連しているように思われる。M.ウェーバーが「アジアの都市は君侯の要塞である」（傍点原文）としたのも、このことであるが、ここでの論点を明らかにしておくために、アジアの都市についてのウェーバーの指摘を、やや長くなるが、一応ここで確認しておこう。

「アジアの諸都市は、散在的には存在しているかもしれない例外的なケースを計算に入れないとすれば、今日知られている限りでは、およそ全く都市ゲマインデ¹¹⁾でなかったか、あるいは萌芽的な形でそうであったにすぎないのである。確かに、アジアの諸都市もすべて市場をもっていたし、またそれらはフエストウングン¹²⁾要塞でもあった。中国においては、日本と異なって、工業や商業の大所在地はすべて、小所在地は多くの場合、防備施設を施されていた。エジプト・近東アジア・印度においても、商工業の所在地は同様である。また同様に、これらの諸国の大商工業地が、特別の裁判区をなしていたことも珍らしくない。中国・エジプト・近東アジア・印度の諸都市は、常に、大政治団体の諸官庁の所在地であった。ところが、正にこの最後の点こそ、とりわけ北ヨーロッパにおける初期中世の西洋都市の特徴的類型をなしていなかった点なのである」。

「……けだし、都市ゲマインデたりうるためには、少なくとも比較的強度の工業的・商人的性格をもった定住地であり、しかもさらに次の諸標識が当てはまるようなものでなくてはならないからである。すなわち、(1)防備施設をもつこと、(2)市場をもつこと、(3)自分自身の裁判所をもち、かつ——少なくとも部分

的には——自分自身の法をもつこと、(4)団^{フェアバン}体の性格をもつこと、またこのことと関連して、(5)少なくとも部分的な自律性と自^{アウトノミー}首^{アウトゲフアリー}性^{フルステン}とをもっていること、すなわち、市民自身が何らかの仕方でその任命に参加するとき官庁による行政をもっていること、これらの諸標識があてはまらなくてはならない。……したがって、これらの権利の担い手としての特別の市民身分なるものが、政治的意味における都市の特徴をなしていたのである」。

「……けだし、アジアの都市は、通常は、その国の高級官吏や君^{フルステン}侯の住地であり、彼らの護衛兵の直接の監視下におかれていたからである。アジアの都市は君侯の要塞」であった。(以上、傍点原文)

われわれ(日本)の都市が果して(あるいはどの程度)そうであったかの解明は、さけて通れない、当面の大きな論点である。そして、これは又、われわれの社会そのものの解明にも不可避の論点であろう。

—1995. 6. 20—

注

- 1) 岩男耕三「都市と人間——人間にとって都市とは何か——(1)」(『国際経営フォーラム』第6号 1995)
- 2) 高島忠平「吉野ケ里」(『岩波講座 日本通史 第2巻, 古代1』岩波書店, 1993)
- 3) これまで、「アジアの古代都城は、農村のなかに形成された専制君主の宿营地であり、農工未分離の経済的構造のうえにできた余分の胎児にすぎないとみるべきであり、その意味では、これはいかなる点からも都市とよぶべきものではない」(狩野久『日本古代の国家と都城』東京大学出版会, 1990, 226ページ)というのが広い共通理解とされているが、高島報告はこれに対する新しい提言といえよう。
- 4) 広瀬和雄「考古学から見た古代の村落」(『岩波講座 日本通史 第3巻, 古代2』岩波書店, 1994) 以下の記述は本稿による。
- 5) 和田 萃『古墳の時代』49～52ページ(『大系 日本の歴史 2』小学館,

1988)

- 6) 寺沢 薫「纏向遺跡と初期やまと政権」(『橿原考古学研究所論文集 6』1978)
- 7) 鬼頭清明「六世紀までの日本列島——倭国の成立」57～58ページ(『岩波講座 日本通史 第2巻 古代1』岩波書店, 1993)
- 8) 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』岩波書店, 1989, 492～493ページ
弥生時代の大規模環濠集落は、「集住性の高さを示すこと, 周囲を濠や土塁で圍繞すること, このなかに手工業生産の工房が存在すること, さらに物資流通の拠点の役割を有している点」などを重視すると, これは単なる農耕集落とはいいがたい, しかし, 「古代中国の城郭都市」に比べて, 「階級関係, 商工業者の成長が未成熟」であり, 「農耕村落との機能的分離が徹底」していないことから, 「都市の萌芽形態」にとどまったと, 都出は論じている。
- 9) 佐賀県教育委員会編『吉野ヶ里遺跡と古代国家』吉川弘文館, 1995
- 10) M.ウェーバー, 世良晃志郎訳『都市の類型学』創文社, 1965, 42～45ページ
- 11) Gemeinde の語は, (1)国家に下属する多少とも自治的な公共団体, とりわけ「地方公共団体」, (2)信仰の共同にもとづく「宗教的団体」, の2つの意味に用いられるのが普通であり, ウェーバーの用語法も原理的にはそうである。ウェーバーも, しばしば(1)の意味で「ゲマインデ」の概念を用いている。しかし, 彼は, ギリシアのポリスやローマの初期の同盟市のような・他の包括的な政治団体(国家)に下属することのない・むしろそれ自体が「国家」であるような団体をも, 「ゲマインデ」の概念で扱っている。(注10)の訳書27ページの訳者の解説による)。